

日本人による中国語文法著述における「動詞」の下位分類

——他文典との継承関係の解明——

盧 驍

Study on subclassification of “Verbs”
in Chinese grammar books written by Japanese scholars
—Elucidation of the inheritance relationship with other grammar books—

LU Xiao

This paper is a study of the description of “verbs” in Chinese grammar books written by Japanese scholars in Meiji and Taisho era. Various kinds of classification methods were adopted by Japanese scholars on the subclassification of verbs, such as “doji” and “seji”, “kandoji” and “fukandoji”, “honraidoshi” and “tenraidoshi”, “tanjundoshi” and “fukugodoshi”, “naidoshi” and “gaidoshi”, “jidoushi” and “tadoshi”. Some were derived from “*Ma shi wen tong*”, others were inherited from “*Gohoshinan*”. In this paper, I will clarify what kind of criteria such classification method was based on. Moreover, I will compare the classification methods and related descriptions taken up in each book with the representative grammar books of Japan and China published almost at the same time, to investigate the influence from both Chinese and Japanese sides on the theory of “Verbs” constructed by Japanese scholars.

キーワード：動詞，中国語文法著述，日本人研究者，継承関係，『語法指南』

はじめに

日本における中国語文法の研究は、荻生徂徠や皆川淇園といった漢学者による江戸時代以来の伝統があるとは言え、「文法」がまだ漢詩文における修辞術の好拙を論じたり、助辞、虚字の使い方を説いたりする「漢文の法」と認識されたものであった故、江戸初期から幕末までに成立した漢文法の著述が今現在でいう「文法」の概念を基に編述されたものとは言い難い。開国後、近代西洋の文法観の移入に伴い、言語における法則としての「文法」が次第に認識されるようになり、日本国内の言語研究の展開および近代文法観の醸成に多大な影響を与えた。明治以降、洋風日本語文典の続出とともに、日本の中国語口語文法の研究も本格的な開花期を迎え始めた。

明治・大正期に日本人の手によって刊行された十数冊の中国語口語文法著述には、品詞別ごとに説明

が与えられ、全体構成が示されたものが殆どである。但し、各品詞部門に割り当てた紙幅が全て均等であるとは言えない。中では、極めて比重をおいたのは動詞に関する事柄である。とりわけ、動詞は、日本人研究者によってそれがどのような性質を備え、如何なる構造を為し、どういった機能を果たしているかに基づき、「動字」と「静字」、「貫動字」と「不貫動字」、「本来動詞」と「転来動詞」、「単純動詞」と「複合動詞」、「内動詞」と「外動詞」、「自動詞」と「他動詞」というなど、様々に下位分類されていた。

本稿では、これらの文法書類における動詞の下位分類に関する記述に対して整理分析を行い、日本人研究者が中国語の動詞をどのように観察、認識しているのかについて検討を加え、上記のような取扱いがそれぞれ如何なる規準を基に行われたのかを明らかにしたい。一方、各書に取り上げられた動詞の下位カテゴリーに用いられた術語の由来について、ほぼ同時期に世に問われた中日両国の代表的な文法研究の成果、乃至中国の古典にその根拠を求め、日本人研究者によって構築された動詞論に秘められている他文典との継承関係の解明を試みる。以上の検討を通して、近代日本における中国語文法研究の展開に及ぼした「内」と「外」からの影響を究明しようとする。

一. 動詞の下位分類とその基準

明治・大正期に日本に於いて刊行された中国語文法書には、動詞に対して下位分類を行ったものが10冊ある。具体的に如何なる分類がなされたのかは下表に示されている通りである。

表1 日本人による中国語文法著述における動詞の下位分類

書名	刊行年次	名称	分類
支那文典	明治10年	動詞	静字
			動字
大清文典	明治10年	靠托言	静字
			動字
支那文典	明治26年	動詞	静字
			動字
清語文典	明治38年	本来動詞	単純動詞
			複合動詞
		転来動詞	単純動詞
			複合動詞
		自動詞	無対自動詞
			有対自動詞
他動詞	無対他動詞 (単対他動詞)		
	有対他動詞 (複対他動詞)		
清語正規	明治39年	動詞	自動詞
			他動詞
支那語文法	明治41年	動詞	自動詞
			他動詞
			助動詞

			複合動詞
			自動詞
			他動詞
			添意動詞
			助動詞
			単純動詞
			複合動詞
			自動詞
			他動詞
			合成詞
			貫動詞
			不貫動詞
			敬語動詞
			静動字
			活動字
			自動字
			他動字
			内動詞
			外動詞
			同動詞
			助動詞
北京官話文法・詞編	大正8年	動詞	
北京官話支那語文法	大正8年	動詞	
支那語語法	大正10年	動詞	
支那語文法研究	大正11年	動詞	

1.1 「動字」と「静字」

大槻文彦解『支那文典』（1877）では、原書『文学書官話』（1869）における「動字」と「静字」について次のような解釈が行われている。

動字就是，走，飛，想，講，寫，打，吃，來，去，行，開，愛，恨，信。這樣的話都是活動的。是即チ行為ヲ言フ者ニシテ其語総テ活動スルモノナリ¹⁾。

静字就是，是，有，值，站，坐，死，住，在，為。這樣的話都是寂靜的。是即チ其情勢ヲ言フ者ニシテ其語皆静寂セルモノナリ²⁾。

『支那文典』以外、大正10年に刊行された『支那語語法』においても、動詞の下位分類として、「活動字」、「静動字」との術語が使用されている。

活動字トハ主格ノ行為ヲ表示スル語ヲイフ。

1. 人走路
2. 蠶能吐絲
3. 風刮得厲害
4. 我要看書
5. 你別信他的話³⁾

1) 大槻文彦，『支那文典』，下卷，文求堂，1877，p1

2) 大槻文彦，『支那文典』，下卷，文求堂，1877，p2

3) 宮島吉敏，『支那語語法』，干城堂，1921，p74

静動字トハ主格ノ状態ヲ表示スル語ヲイフ。

1. 梨是好果子 2. 我有要緊的事 3. 那張畫兒值一千塊錢
4. 他現在在天津哪 5. 兄弟在院子裡站著 6. 他的相貌很像哥哥⁴⁾

『文学書官話』の著者 Tarlton Perry Crawford は「走, 飛, 寫, 打, 吃」等の動作動詞, 「來, 去」のような方向動詞, 「愛, 恨」の如くの心理活動動詞を「動字」と称し, 「是」のような判断動詞, 「有, 在」のような存在動詞, 「站, 坐, 死, 住」のような持続動詞, 即ち物事の状態や有様を表す動詞を「静字」と名付けたのである。大概が其々「行為を言うもの」と「情勢を言うもの」と注釈を付けたのは原著者の考えを的確に把握している現れである。それに, 宮島 (1921) によって使われた「活動字」と「静動字」も上記で示されているように, 行為か状態か, そのどちらかを表現することによって決められた術語である故, 『支那文典』も『支那語語法』も動詞の語彙的意味を基準にこのように分別しているわけで, 「動」, 「静」はそれぞれ動詞の動態義と静態義を表すのに使われた概念である。

1.2 「本来動詞」と「転来動詞」

『清語文典』には, 形式分類と内容分類との二法が採用されている。形式分類法に応じて, 動詞は「本来動詞」と「転来動詞」に分けられている。

本来動詞: 走 (歩ム), 去 (行ク), 回 (返ル), 聽々 (聞ク), 瞧々 (見ル)

転来動詞: 花 (費ス), 幹 (為ス), 頑兇 (遊ブ)⁵⁾

「本来動詞」の「走」, 「去」, 「回」, 「聽」, 「瞧」は, 元々動詞の品別に所属するものである。それに対して, 「転来動詞」とは, ほかの品詞類より転用されるものである。例えば, 「花」, 「桿」は名詞より転来してきたものであり, 「頑」は形容詞が化して動詞となるものである。即ち, 「本来動詞」と「転来動詞」は, 言葉の本来の性質を基に成り立った分類法である。

1.3 「単純動詞」と「複合動詞」

『清語文典』に於いて, 前に述べられた「本来動詞」と「転来動詞」は, その語の成り立ちから更に「単純動詞」と「複合動詞」に分けられている。また, 『支那語文法』にも「複合動詞」が一つの下位分類として取り上げられ, 『北京官話文法・詞編』にも動詞の構造上より, 同じように分類されている。詳しくは下表のように示すことができる。

4) 宮島吉敏, 『支那語語法』, 干城堂, 1921, p75

5) 信原継雄, 『清語文典』, 青木嵩山堂, 1905, pp56~57

表2 中国語文法書における「単純動詞」と「複合動詞」

書名	単純、複合動詞		例語	
清語文典 (1905)	単純動詞		走, 去, 回, 花, 幹	
	複合動詞		聽聽, 瞧瞧, 頑兒	
支那語文法 (1908)	複合動詞	動詞ノ結合 シタルモノ	普通体	拆開, 遮住, 找着, 想到, 来及, 賣了, 打過, 抬動, 看見, 辦完, 辦成, 裝上, 寫下, 回去, 買來, 花起, 站起來, 露出來, 倒過來, 追下去, 飛過去, 跪下來, 倒出去
			可能体	拆得開, 遮得住, 找得着, 想得到, 来得及, 賣得了, 打得過, 抬得動, 看得見, 辦得完, 辦得成, 裝得上, 寫得下, 回得去, 買得來, 花得起, 站得起來, 露得出來, 倒得過來, 追得下去, 飛得過去, 跪得下來, 倒得出去
			不能体	拆不開, 遮不住, 找不着, 想不到, 来不及, 賣不了, 打不過, 抬不動, 看不見, 辦不完, 辦不成, 裝不上, 寫不下, 回不去, 買不來, 花不起, 站不起來, 露不出來, 倒不過來, 追不下去, 飛不過去, 跪不下來, 倒不出去
	動詞ト副詞 の結合シタル モノ	普通体	吃多, 說清楚, 摸清, 聽明白	
		可能体	吃得多, 說得清楚, 摸得清, 聽得明白	
		不能体	吃不多, 說不清楚, 摸不清, 聽不明白	
北京官話文法・詞編 (1919)	単純動詞		買, 賣, 去, 來, 站, 走, 跑, 聽, 看, 瞧, 吃, 喝, 咽, 找, 哭, 笑, 罵, 念, 開, 關, 打, 想, 做, 曉, 擺, 寫	
	複合動詞		喜歡, 吩咐, 保管, 介紹, 疑惑, 教訓, 看見, 叫做 仰望, 謄寫, 抄寫, 弄壞, 盼望, 會見, 疑惑, 預備	
北京官話支那語文法 (1919)	合成動詞	動詞ト動詞	看見, 看得見, 看不見, 站住, 站得住, 站不住, 想到, 點上, 攔下, 買來, 拿去, 說開, 睡著, 包住, 說到, 吃上, 改了, 走過, 聽見, 辦完, 下去, 叫來, 包起來, 看出來, 說上來, 抄下來, 翻過來, 吃下去, 飛過去, 典出去	
		動詞ト副詞	吃多, 算清, 說清楚, 聽明白	

上掲の用例に示されているように、動詞はその構造上より、「単純動詞」と「複合動詞」の二種類に大別されている。一文字で構成される単音節動詞を「単純動詞」と、動詞を動詞又はほかの品詞と組み合わせて二文字以上の多音節語を成すものを「複合動詞」、又は「合成動詞」とするのがほぼ共通的に見られる。『清語文典』（1905）では、「複合動詞」の例語として挙げられたのは「聽聽」、「瞧瞧」のような動詞のAA式重ね型と、「頑兒」のような語根と接辞によって構成された派生語である。

『支那語文法』では、「複合動詞」は更に動詞の本来の意義を有する「普通体」、動詞の動作が可能であることを表す「可能体」、及びその動作が不能であることを示す「不能体」という三種の体に分けられている。「可能体」と「不能体」はそれぞれ「普通体」に「得」、「不」を差し込むことにより形作られるものである。『北京官話支那語文法』に於いて、語の構成上から動詞と動詞の結合によって構成された合成動詞と、動詞と副詞からなる合成動詞と区別を付けている。ところが、上表に列記している言葉の中、本来統語構造と見るべきものを複合語として取り扱う例も少なからず取り上げられたため、以下では具体的に検討してみる。

● 「動詞＋方向補語」

『支那語文法』に挙げられる「裝上」、「寫下」、「回去」、「拿來」、「説起」、「站起來」、「露出來」、「跪下來」、「倒過來」、「追下去」、「飛過去」、「跪下來」、「倒出去」、及び『北京官話支那語文法』における「點

上],「擱下」,「拿去」,「買來」,「説開」,「包起來」,「看出來」,「説上來」,「翻過來」,「吃下去」,「飛過去」,「抄下來」,「典出去」は複合動詞ではなく,補充関係に基づいて結ばれる動補構造である。方向動詞の「~上」,「~下」,「~去」,「~來」,「~起」,「~起來」,「~出來」,「~下來」,「~過來」,「~下去」,「~過去」,「~下來」,「~出去」等は上記の文法著述に於いて複合動詞を構成する形態素として扱われている。実際に,この場合,上記の方向動詞は前の動詞により表現される動作や行為の方向,動態に対して補充と説明を加える文成分,即ち方向補語に充てられているのである。但し,中国語の複合語を構成する形態素間の構造関係が統語構造の構造関係とはほぼ一致しているため,時として両者の境界線を決めるのが至難な業である。それ故,「動詞+方向動詞」という組み合わせが語であるか否かは研究者によって些細な意見の食い違いが存在している。呂叔湘(1981)はこのような構成を「短語」(フレーズ)と「語」の間に介在するものと捉え,「短語式動詞」と名付けた。藤堂(1956)は,行為や現象を表す動詞と「來」,「去」,「出」,「進」,「回」,「過」によって組み立てられた「拿回來」,「送過去」,「走進去」のようなものを複合語ではなく,「助ける基本構造⁶⁾」と捉えている。ほかにも,劉月華(1983),朱德熙(1997)に代表される研究者らが動詞に後接する方向動詞を方向補語と明示することからすれば,現代中国語文法に於いて最も受け入れられたのが統語構造説であると判明できる。複合の度合いから見ても,「搬東西下去」,「拿小票來」という使い方があるように,動詞と補語はその間に賓語を挟むこともできるゆえ,決して密接不可分な関係にあるとは言えない。

●「動詞+結果補語」

『支那語文法』に挙げられた「拆開」,「遮住」,「找着」,「想到」,「賣了」,「打過」,「抬動」,「看見」,「辦完」,「辦成」,「吃多」,「説清楚」,「摸清」,「聽明白」は同じく「動補構造」と見做すべきである。但し,上述の方向補語を伴う場合と異なり,動詞「~開」,「~住」,「~着」,「~到」,「~了」,「~過」,「~見」,「~完」,「~成」,形容詞「~多」,「~清楚」,「~清」,「~明白」は前の動詞が示す動作または変化によって生じた結果を表す役割を担う結果補語である。この「動詞+動詞/形容詞」の組み合わせが果たして複合語か統語構造かについて,以下のような論説が行われてきた。太田辰夫は「この種の複合動詞は,複合のしかたが必ずしも十分ではないため,そのあとの語を補語とする説もある。しかし補語とすることは少し適切でないようなので,本書ではこれを複合動詞とする」⁷⁾と複合語説を主張している。それに対して,藤堂明保(1957)はそれを「補う構造」と指摘し,後半部の成分が補語であると明確に示している。朱德熙(1997)は『語法講義』において複合語と統合構造の区別をつけるための極めて有効な手段の一つとして,拡張という方法を取り挙げている。この方法を用いて以上の表現の言語成分の結合度を検証した末,何れも或る程度の拡張,例えば助詞「得」,否定副詞「不」の挿入が可能であるため,動補構造として扱ったほうが適切ではないかと考えられる。『北京官話文法・詞編』における「弄壞」と『北京官話支那語文法』における「站住」,「想到」,「睡著」,「包住」,「説到」,「聽見」,「辦完」,「吃多」,「算清」,「説清楚」,「聽明白」も同じく結果補語を伴う動補構造である。

6) 藤堂明保,『中国語の研究』,1956,江南書院, p68

7) 太田辰夫,『中国語歴史文法』,朋友書店,2013, p204

ついでながら、啊麼徒は『北京官話文法・詞編』に於いて、上述の方向補語、結果補語となる動詞を「添意動詞」と呼び、「本来独立シタル動詞ナレトモ、他ノ動詞ニ從屬的ニ結合シテ、其動詞ノ表ハス動靜ヲ、更ニ明確ニスル為メ二用ヒラルル動詞ナリ」⁸⁾と定義し、「添意動詞」が附属する主なる動詞を「根幹動詞」と称する。それに、同氏は両者の間にほかの成分を挟む場合があることも提示している。啊麼徒は「根幹動詞+添意動詞」との構造を「複合動詞」の一類に帰しないのは恐らく同じ理由によると推し量る。

●「動詞+可能補語」

『支那語文法』における「複合動詞」の「可能体」(~得~)と「不可能体」(~不~)、及びほかの書物にある同じ構造を持つ表現は可能補語を伴う動補構造である。動詞に後続するものが方向動詞である場合は「得/不+方向補語」式の可能補語で、動詞の後に動作や行為による結果を表す動詞或いは形容詞が来る場合は「得/不+結果補語」式の可能補語である。換言すれば、上掲の「方向補語」と「結果補語」の殆どは「得」、「不」を付け加えることを通して「可能補語」を組み立てることができる。但し、このような可能補語の中には対応する「動詞+方向/結果補語」の形式がないものもある。例えば、「来得/不及」は各言語成分が密接に結合し、既に熟語化したもので、「来及」という言い方は成り立たない。同書にはまた「買得/不起」、「花得/不起」、「瞧得/不起」、「趕得/不及」、「抬得/不動」などのような熟語型可能補語も挙げており、其々に対応する「買起」、「花起」、「瞧起」、「趕及」、「抬動」は複合語としても統語構造としても成立しないものである。

1.4「貫動字」と「不貫動字」

『官話文法』では、「動字」は「貫動字」と「不貫動字」と二大別されている。

有貫動字、不貫動字兩種、能由此及彼者、謂之貫動字、不能及者、謂之不貫動字⁹⁾。

それに、「貫動字」と「不貫動字」について、以下の用例が挙げられている。

客喝茶、人買書、馬拉車
 你上街去、他上學堂來、鳥兒在天上飛¹⁰⁾

「貫」というのは即ちある事物からほかの事物まで通し、両方を繋ぎ合わせるという意味である。引用文における「由此及彼」という言葉から分かるように、「此」は主語のことで、「彼」は賓語を指すのである。著者は動詞の機能を、主語と賓語と関連させることと認識している。そのため、例語の「客喝茶」

8) 啊麼徒, 『北京官話文法・詞編』, 文求堂, 1919, p76

9) 田中慶太郎・張廷彦, 『官話文法』, 救堂書屋, 1905, p5

10) 田中慶太郎・張廷彦, 『官話文法』, 救堂書屋, 1905, p5

「人買書」,「馬拉車」の「喝」,「買」,「拉」が「貫動字」とされたのは、それらの動詞が上に置かれる主語の「客」,「人」,「馬」と下に付く賓語の「茶」,「書」,「車」と結び付けたからである。「你上街去」,「他上學堂來」,「鳥兒在天上飛」の「去」,「來」,「飛」がなぜ「不貫動字」と考えられたかという、それらの動詞の下に賓語を取らないため、「貫」或いは「由此及彼」の役割が果たせないわけである。要するに、主語と貫通する対象の有り無し、換言すれば「賓語」の有無は動詞を「貫動字」か「不貫動字」かを判断する標準である。本書における動詞の分類もこの文法機能を基準に行われているのである。

1.5 「内動詞」と「外動詞」

「内外動詞」という術語は『支那語文法研究』(1922)にしか使われず、其々以下のように定義されている。

外動詞

これは或る者の動作が他に影響し、又は他の動作が受動的にその或る者に及ぼして来るのであって、或る者が他の事物或は人より働きかけられた場合に其の事物なり人なりを受事と呼ぶのである。他打死了一条蛇。この場合に蛇の如きを受事と言ふのである¹¹⁾。

内動詞

その者の動作するのがその者の本身にあって、他の事物に関係しない。例へば月亮出来了とか鳥兒飛着哪の如く、出るとか飛ぶとか言ふのが内動詞である¹²⁾。

米田(1922)は、動作主の行為が主体以外のものに及ぼし、或いはその動作の受け手となるもの、即ち「受事」を持つ動詞を「外動詞」と言い、動詞の動作が動作主の内部に留まり、ほかの事物に影響を及ぼさないものを「内動詞」という。簡単に説明すると、「外動詞」は主語のほかに、「受事」無くしては為し得ざる動作状態を表すのに対して、「内動詞」は主語の動作を説明することに止まるものである。動詞の下に「受事」、今現在で言う「賓語」が来るかどうかは「内動詞」と「外動詞」の最大の相違点である。従って、動詞の「内」と「外」を分別する基準は動詞の文法機能である。

1.6 「自動詞」と「他動詞」

日本語資料に於いて、「自動詞」と「他動詞」は使用頻度の最も高い一組である。

自動詞とは、蝶が飛ぶ、花が散る、の飛ぶ、散る、の如く、動作が他物に、推及ぶ事の無い者を云ふので、他動詞とは、人が枝を折る、猫が鼠を捕る、の折る、捕る、の如く、動作が他の物に及ぶのである¹³⁾。

11) 米田祐太郎,『支那語文法研究』,大阪屋号書店,1922,pp57~58

12) 米田祐太郎,『支那語文法研究』,大阪屋号書店,1922,pp62~63

13) 信原継雄,『清語文典』,青木嵩山堂,1905,p57

自動詞トハ其動作スル所ガ単二動作スル其者ノミニ止マリテ他ヘ移リ行カザルモノ即チ目的辞ヲ有セザル動詞ナリ。他動詞トハ其動作スル所ガ其他ノ何物ニカ移リ行クモノ、即チ目的辞ヲ有スル動詞ヲ云フ¹⁴⁾。

自動詞トハ、動作ノ主タル事物ノ外、別二動作ヲ受クル他ノ事物ヲ要セザル動詞ヲ云フ。他動詞トハ、動作ノ主タル事物ノ外ニ、動作ヲ受クル事物ヲ加ヘテ、語意甫メテ通ズル動詞ヲ云フ¹⁵⁾。

動詞ノ動作スル所ガ単二動作スル其者ノミニ止マリテ他ヘ移リ行カザルモノ即チ目的語ヲ有セザル者ヲ自動詞ト謂フ。動詞ノ動作スル所ガ其他ノ何物ニカ移リ行ク者或ハ他ノ者ヨリ動作をサセラルル者即チ目的語ヲ有スル動詞ヲ他動詞ト云フ¹⁶⁾。

自動字トハ単二自分ダケノ行為ニシテ主格ノ行為ガ他ノ名詞代名詞ヲ支配処分セザルモノヲイフ。他動字トハ主格ガ他ノ名詞代名詞ヲ処置支配スル場合ノ動作ヲイフ¹⁷⁾。

以上のあらゆる記述に共通することは自他動詞を見分ける規準である。何れも動作主の行為が他の物事にかかるかどうか、動詞の下にその動作を直接に蒙るものがあるか否か、即ち文法機能により、両者を分別しているのである。その上、上掲の諸説では、例えば、宮脇（1922）が石山（1908）による定義をそのまま自作に採り入れているなど、変更がなく前人の説を継承したものもある。一つ注意すべきことに、信原だけが、日本語の例を用いて中国語の自他動詞を解釈している。日本語に於いて格助詞「を」を必要とするものが大抵他動詞で、不必要なものは大抵自動詞という考え方から、同氏は日本語の「自他動詞」の文法概念を中国語文法の研究に適用しようとした姿勢が分かる。

二. 動詞の下位分類に見られる他文典との継承関係

2.1 中国の古典に由来する「動字・静字」

『文学書官話』の和訳本、大槻文彦解『支那文典』（1877）、金谷昭訓点『大清文典』、村上秀吉著『支那文典』が原書『文学書官話』（1869）における「動字」と「静字」という術語を踏襲したことは前には既に述べられた。ところが、この動静の説を通時的に調べると、南宋の時代には既に「動」と「静」の使い分けに関する論説が行われたことは明らかにされた。

霸諸侯注雲霸與伯同。愚意諸侯之長為伯，指其定位而名，王政不綱，而諸侯之長自整齊其諸侯，則伯聲轉而為霸，乃有為之稱也。正音為靜字，轉音為動字¹⁸⁾。

「伯」は「諸侯の長」を指し示し、事物の名称として使われる場合、本来の発音「伯」と読むべく、「静

14) 石川福治、『支那語文法』，文求堂，1908，p96

15) 啊麼徒、『北京官話文法・詞編』，文求堂，1919，p73

16) 宮脇賢之介、『北京官話支那語文法』，大阪屋号書店，1919，pp40～41

17) 宮島吉敏、『支那語語法』，1922，干城堂，pp76～77

18) 黄震、『黄氏日抄』，『景印文淵閣四庫全書』，台湾商務印書館，1986，pp416～417

字」即ち名詞である。「伯」は「有為」と意味し、行為、動作を言い表すのに用いられる場合、「動字」に転用されるとともに、読み方も「覇」に変わるわけである。「動字」は動作、行為を指すのに使われたのに対して、「静字」は最初に名詞の意味で用いられた。同一の字が静字から動字に転用されるとともに、その読み方も異にするべきということである。清『説文句読』には「然動靜異読、已萌芽於漢」¹⁹⁾ という記述があることから見ると、動靜説の源は漢の時代にまで遡及できると窺える。また、同書には「鬣、説文毛鬣也。毛鬣語髮同意、静字也、本注下文有云鬣鬣、則兩字又皆可用為動字也」²⁰⁾ と記されており、静字が名詞、動字が動詞を指し示すことは変わらないが、そのような区別による読み方の相違はなくなった。内田(2010)の指摘によると、『文学書官話』より50年も前にRobert Morrisonによって著わされた『通用漢言之法』(1815)では「動字」、「静字」という術語は既に使われたという。

The verb is also denominated 動字, a moving word, and the Noun 静字, a quiescent word²¹⁾.

Robert Morrisonは動字と静字との名称を統用したのみならず、動字が動詞で、静字が名詞を指し示すという見方まで継承したのである。なお、「静字」と「動字」は『馬氏文通』にも使用されている。「動字」は即ち動詞のことで、「静字」に関しては以下のように述べられている。

静字所以肖事物之形者……統分兩門、曰象静、曰滋静、象静者、以言事物之如何也、滋静者、以言事物之幾何也……²²⁾

簡単に説明すると、「静字」は物事の有様を言う語で、更に「象静」と「滋静」に分けられている。「象静」は物事の性質や状態を表し、「滋静」は物事の数量を指すという。換言すれば、『馬氏文通』では、「静字」というのは形容詞と数詞の総称である。

要するに、本来中国の古典に起源する「静字＝名詞」、「動字＝動詞」という動靜説は19世紀に西洋人宣教師により受容され、自らの中国語研究に採り入れられた。注意すべきところに、Robert Morrisonの動靜論は元来の説とはほぼ変わらないのに対して、Tarlton Perry Crawfordは「静字」と「動字」を動詞の下位カテゴリーの名称として用い、前者が情勢を、後者が行為をいうものと捉え始めた。また、大正10年に刊行された『支那語文法研究』における「静動字」の項に挙げられた例語には『支那文典』と重なる部分があり、例えば、「是」、「有」、「在」、「値」などの例語が両方にも現れている。そこからすれば、米田が『馬氏文通』より『文学書官話』の和訳本『支那文典』を参考した可能性は遥かに高いのではないかと思われる。

19) 鄭奠・麦梅翹、『古漢語語法學資料匯編』, 中華書局, 1964, p105

20) 鄭奠・麦梅翹、『古漢語語法學資料匯編』, 中華書局, 1964, p107

21) Robert Morrison, 『通用漢言之法』, Serampore Mission-press, 1815, p113

22) 馬建忠、『馬氏文通』、第三卷、商務印書館、1920、p31

2.2 『馬氏文通』に由来する「内動詞・外動詞」

『支那語文法研究』に用いられた「内動詞」, 「外動詞」が動詞の文法機能に基づく分類法であるが, このような捉え方は, 初めて「外」と「内」の概念を以て動詞を分類した『馬氏文通』(1898)とは離れがたい関係にあると思われる。

一其動而仍止乎内也, 曰内動字, 一其動而直接乎外也, 曰外動字, 而凡受其行之所施者, 曰止詞, 言其行之所自發者, 曰起詞, 公羊傳隱西元年雲, 夏五月, 鄭伯克段于鄆, 克之者何, 註雲, 加之者, 問訓詁, 並問施於之為, 夫施愚者, 即行之所施也, 止詞也, 施者起詞也, 然則動字之行, 可以施受二字明之者, 有由矣²³⁾。

「動而仍止乎内」とは動詞の動作する所が単に主体の事物の内にとまり, 動作主以外のものには及ばないことで, 「動而直接乎外」とは動詞の動作が主体以外のものにも移り行き, 影響を与えたことである。動詞が示す行為を起こす主体は「起詞」と, 動作を受ける対象は「止詞」と命名されている。「外動字」は「起詞」と「止詞」両方とも有するのに対して, 「内動字」は「止詞」を取らない。「起詞」と「止詞」はまた「施」, 「受」の二字で表現することができる。

『支那語文法研究』における「内」と「外」, 「施」と「受」の概念を馬建忠の論説と対照すると, 術語そのもののみならず, それをめぐる解釈までほぼ一致していることが明白である。「内動詞」と「外動詞」に限らず, 同書におけるもう一つの下位カテゴリー, 「同動詞」というのも『支那語文法』が『馬氏文通』と深く関わっていることの証左である。

同動詞。これは動詞でありながら些の動作を表示しない。唯一種不動の情景を表示する動詞である。他是一個木匠, 河里有一隻船, 盜賊的家庭在恐怖里頭²⁴⁾。

凡動字所以記行也, 然有不記行而惟言不動之境者, 如“有”“無”“似”“在”等字, 則謂之同動, 以其同乎動字之用也²⁵⁾。

馬建忠は「有」, 「無」, 「似」, 「在」などを意味的には「不記行」, 即ち動作や行為をいわず, 「惟言不動之境」, つまり単に「不動」な状態や有様を表し, 使い方の上では動詞とはほぼ同じものと捉え, 「同動字」と名付けたのである。米田による定義がそれと極めて類似しているため, 『支那語文法研究』における『同動詞』が『馬氏文通』を参照した上で設けられた可能性がかなり高いと言えよう。尚, 両書における動詞に対する分類の仕方を比較すれば分かるように, 『支那語文法研究』では動詞が「外動詞」, 「内動詞」, 「同動詞」, 「助動詞」と4大別されたのは疑いなく『馬氏文通』における「外動字」, 「内動字」, 「受動字」, 「同動字」, 「助動字」, 「無属動字」という分類法に依拠したものと判明できる。

23) 馬建忠, 『馬氏文通』, 第四卷, 商務印書館, 1920, p1

24) 米田祐太郎, 『支那語文法研究』, 1922, p63

25) 馬建忠, 『馬氏文通』, 第四卷, 商務印書館, 1920, p45

2.3 『語法指南』に由来する「自動詞・他動詞」

日本人によって著わされた中国語文法書のみならず、現代中国語文法でも用い続けられている「自動詞」、「他動詞」という専門用語は、その起源を辿ってみると、洋風日本語文典が続出した明治前期に遡及できる。

日本の国語学者、大槻文彦は1889年に『言海』に附載された『語法指南』に於いて、初めて「自動詞」と「他動詞」を取り挙げたのである。

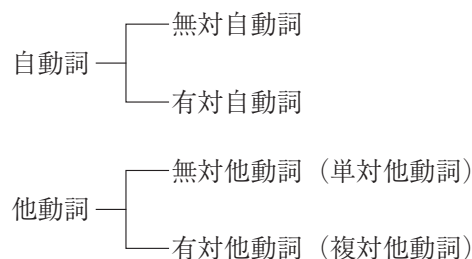
自ラ動作シテ、他ノ事物ヲ処分スルヲナキ意ノモノヲ、「自動性」トス。例ヘバ、「花、飛ぶ」、「蝶、驚く」の「飛ぶ」、「驚く」ノ如シ、其動作、ソノママニテ通ズ。自動性ノ動詞ヲ略シテ、自動詞トモ言フ。

動作ノ、他ノ事物ヲ処分スル意アルモノヲ、他動性トス。例ヘバ、「蠶ハ、絲ヲ吐く」、「蜂ハ、蜜ヲ醸す」、ノ「吐く」、「醸す」ノ如シ。コレヲ、唯、「蠶ハ、吐く」、「蜂ハ、醸す」、トノミイヒテハ、其意、未ダ全ク通セズ、必ズ、「何を」ト問ハルベシ、然ルトキハ、其処分スベキモノヲ挙ゲテ、「絲を」、或ハ、「蜜を」ト答ヘズハアルベカラズ、而シテ後二、其意ヲ全ウス。他動性ノ動詞ヲ他動詞トモイフ²⁶⁾。

中国語文法書における「自他動詞」に関する記述を大槻の論説と比較すれば明白になるが、用語の上では全く同じであるのに加え、自他動詞を分別する基準も実際によく似ており、大差はないのである。上記のことから、日本人研究者らが大槻から受け継いだ日本語の「自他動詞」の文法概念を中国語の実態、特徴に応じて中国語文法の研究に生かそうとする姿勢は窺い知れる。大槻文彦によって取り上げられた自他動詞の概念が日本の中国語文法の研究に多大な影響を与えたのも紛れもない事実であると言える。

●自他動詞の「有対」と「無対」

尚、信原継雄による『清語文典』に於いて、自他動詞は更に「対」の有無により細分類されている。



しかしながら、初めて「自他動詞」を「有対、無対」と分類したのも大槻文彦である。

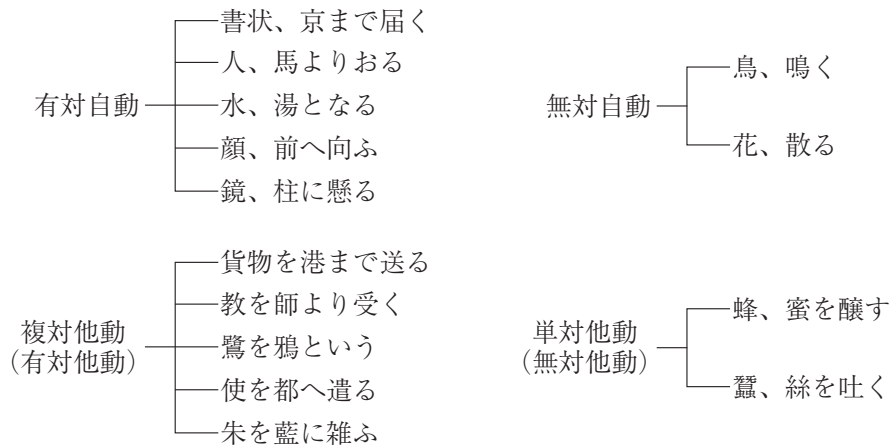
26) 大槻文彦, 『語法指南』, 勉城社, 1996, p18

『語法指南』を世に出した8年後、それを改訂し、更に完備した内容をもって、単行本として刊行した『広日本文典』（1897）では、大槻は自他動詞の有対、無対に関して以下のように定義している。

飛ぶ、鳴く、ノ如キヲ、無対自動ト名ヅケ、懸る、向ふ、ノ如キヲ有対自動ト名ヅケ、総称シテハ、自動詞トイフ²⁷⁾。

吐く、醸す、ノ如キヲ、単対他動ト名ヅケ、雑ふ、なす、ノ如キヲ複対他動ト名ヅケ、総称シテハ、他動詞トイフ²⁸⁾。

本書には、『清語文典』とよく類似した分類図が載せられている。



大槻はまた「貨物」、「教」、「鷺」、「使」、「朱」、「絲」、「蜜」などを「他動詞ノ動作ノ目的」と言い、「目的ニハ、をヲ要ス」と指摘している。それに対して、「京」、「馬」、「湯」、「前」、「柱」、「港」、「師」、「鴉」、「都」、「藍」等を「其動作ノ係ルベキ標準」と云い、「標準ニハ、に、と、へ、より、から、まで、等ヲ要ス」と述べ、「目的」と明確に区別しているのである。以上の例文に示されているように、「標準」と思われる語の後には動作の起こるもと、作用の起点を表す「より」、動作の至り及ぶ到達点を表す「まで」、動作、状態の結果を表す「と」、動作・作用の帰着点、変化の結果を表す「に」、動作・作用の移動・進行する目標・方向を表す「へ」が用いられている。

ところで、『清語文典』（1905）では自他動詞の「有対」、「無対」とは何かというと、以下の記述に示されている通りである。

人が寄る、人が乗ると云ったのみでは、何処に寄るのか、何に乗るか、一向に分からないからし

27) 大槻文彦, 『広日本文典・同別記』, 1980, 勉城社, p66

28) 大槻文彦, 『広日本文典・同別記』, 1897, 勉城社, p67

て、岸に寄るとか舟に乗るとかの如く、更に或る一の語を加へねばならぬ。蝶が飛ぶ、花が散る等は、決して其様な補助者を要せぬ。因って、乗る、寄るの如きを有対自動詞と云ひ、飛ぶ、散るの如きを無対自動詞と云ふ²⁹⁾。

人が枝を折る、の如きはほかの語の補助を要せぬが、人が団子を遣るでは、何者に遣るのか分からないから、人が団子を犬に遣る、の如く、ある補助者を雇うことを要する、因って、この遣るの如きを有対他動詞と云ひ、折るの如きを無対他動詞と云ふ³⁰⁾。

自動詞か他動詞かは動作、行為に直接支配され、又は干渉される人や物の有無、即ち客語の有無によって判断されるならば、有対、無対は動作の帰着点、詳しく言えば動作に関わる対象、或いは場所、方向があるか否かによって生じる区別である。「飛ぶ」、「散る」などの自動詞は、其の「対」の有無に関わらず、その意味はよく通じるのに対して、「乗る」、「寄る」のような自動詞がその動作に係るべき帰着点、即ち「どこに乗る」、「なにに寄る」ということを明らかに示すものを必ず要する。他動詞も、「枝を折る」のような、目的語を取るだけで意味が完全になるものもあれば、「犬に餌を遣る」というような、処置される物事を表す目的語以外に、動作・作用の加えられる対象・相手を表す語なしでは、意味的には通じないものもある。

石山福治(1908)の『支那語文法』に於いて、「有対」、「無対」の概念は現れていないが、その代わりに大槻文法における「対」又は「標準」に相当する「帰着語」の有り無しで、目的語と帰着語を同時に有する場合(有対に当たる)と、目的語しか持たない場合(無対に当たる)に分けられている。石山は信原と異なり、中国語の用例を数多く取り上げている。詳しくは以下のようにになっている。

<p>(甲) 他動詞ノ用法</p> <p>(一) 直接二目的ヲ有スル場合</p> <p>安慰他(彼を慰む) 熬粥(粥を煮る) 斟酒(酒をつぐ)</p> <p>借書(本を借りる) 製造機器(機械を製造す) 吹喇叭(喇叭を吹く)</p> <p>種種兒(種を蒔く) 娶媳婦兒(嫁を娶る) 販鐘錶(時計類を仕入れる)</p> <p>縫衣裳(衣裳を縫ふ) 付銀子(金を交付する) 烤麵包(パンをあぶる)</p> <p>雇東洋車(人力車を雇ふ) 擴充租界(居留地を広げる)</p>	<p>(二) 目的ト帰着語ヲ有スル場合</p> <p>囑咐他一件事(彼に一事を頼む) 給你這個錢(君に比錢を與る)</p> <p>問你那個話(君にあの話を問ふ) 告訴他這個話(彼に此話を告げる)</p> <p>供給你點兒貨(君に品物を少し供給する)</p>
<p>(乙) 自動詞ノ用法</p> <p>(一) 動作ノ帰着語を有セサルモノ</p> <p>天晴了(空が晴れた) 腦乏了(足が草臥れた) 雪化了(雪が溶けた)</p> <p>天黑了(日が暮れた) 眼睛花了(目がかすんだ) 車停了(車が停った)</p> <p>他笑了(彼が笑った) 花謝了(花が散った) 孩子哭了(子供が泣いた)</p> <p>年老了(年老った) 他們樂了(彼等が楽しんだ) 馬跑了(馬が走った)</p>	<p>(二) 動作ノ帰着語ヲ有スルモノ</p> <p>趁機會(機会に乗ずる) 騎自行車(自転車に乗る) 交朋友(交はる)</p> <p>進裡頭(内へ這入る) 做外國(外國に做す) 服侍大人(大人に仕へる)</p> <p>回家鄉(故郷へ歸る) 入學堂(學校に入る) 陪他(彼に相伴する)</p> <p>上山(山に上る) 到東京(東京に着く) 當武官(將校になる)</p> <p>溺愛(愛に溺れる) 在這兒(此處に居る)</p>

29) 信原繼雄, 『清語文典』, 青木嵩山堂, 1905, p58

30) 信原繼雄, 『清語文典』, 青木嵩山堂, 1905, p59

上表に示されている石山による自他動詞に対する扱い方には大槻文法の影響力が見られる。

まず、各用例の日本語訳を見れば分かるように、このような扱いは『広日本文典』における「目的」と「標準」を分別する処理法とは同工異曲である。「を」によって提示されている語は全部目的語とされ、「に」、「へ」を伴う語は全て「帰着語」と見做されているのである。このような取扱いにおいて、石山が日本語文法における自他の別を以て中国語の動詞の分類に適用しようとした模倣の姿勢は顕著である。しかしながら、「目的」を持たずに、「帰着語」しか持たない動詞を自動詞と断定するような扱いは、中国語の性格には合致しているかどうかは更なる検討を要すると考えられる。

従来の中国語文法では、自他動詞（内外動詞、及物不及物動詞）の区別について、以下の諸説が取り上げられる。

他動詞ははっきりと動作の加えられる対象物を予想するものであるが、必ずしもその対象物が句中に現れているとは限らない。これに反して自動詞はそのような対象物を予想すること無く、単なるそれ自体の運動と考えられるものをいう。ところが、中国の文法では、自動、他動の区別を認めないものが多い³¹⁾。

我們分別及物動詞和不及物動詞，不是按照能否帶賓語來區分，而是按照帶什麼種類的賓語來區分。不及物動詞所帶賓語，限於以下幾種：（1）表動量，時量的自身賓語：哭了一天，跑了幾趟。（2）行動的目的地：飛上海，來這兒，去美國。（3）行動的出發地：上山，下船，出門。反之，及物動詞可以帶任何賓語³²⁾。

漢語具有動詞功能的詞，本無及物和不及物之分別，當他存在於具體的命題或句子裡面的時候，它既可以是及物的又可以是不及物的，完全視實際情形如何而定³³⁾。

內動詞和外動詞，有的語法著作裡叫做不及物動詞和及物動詞，或自動詞和他動詞。有些語法著作不主張把動詞區分為內動詞和外動詞，提出的理由是我們沒有辦法把內動詞外動詞截然分開，漢語動詞帶不帶賓語不是絕對的，許多及物動詞經常可以不帶賓語，許多不及物動詞也經常可以帶賓語³⁴⁾。

能帶受事賓語的動詞叫做及物動詞，不能帶受事賓語的動詞叫做不及物動詞³⁵⁾。

以上の諸説論に従えば、単に賓語を取れるかどうかを規準に、これが「自動詞」、これが「他動詞」と言い切るのが実に不適切で、自動他動に兼用するものの存在も無視できないというのは諸研究者の間では共通的に見られる見解である。更に、場合によって賓語を取ったり取らなかったりする動詞があまりにも多くあるのに反して、絶対に賓語を取るか取らない動詞は極めて稀なため、そもそも自他の別を認めるべきではないと主張する研究者さえいる。

趙元任は賓語の有無に拠るのではなく、賓語の種類性質に応じて分別すべきと指摘しているほか、他

31) 太田辰夫、『中国語歴史文法』，朋友書店，2013，p15，p30

32) 趙元任、『漢語口語文法』，商務印書館，1979，pp292～298

33) 高名凱、『漢語語法論』，商務印書館，1986，pp213～214

34) 李臨定、『現代漢語動詞』，中国社会科学出版社，1990，p122

35) 黄伯榮・廖序東、『現代漢語』，商務印書館，1991，p84

動詞はどのような賓語でも取りえると云い、自動詞は動量、時量を表す自身賓語（今では動量、時量補語とする）、行動の出発地や目的地を表す賓語、即ち「処所賓語」しか取れないと具体的に如何に区別するかも明確に述べている。黄・廖も「受事賓語」を取れるか否かを分類の基準にしている。「受事賓語」には動作、行為を直接受ける物事以外、動作の対象や動作から導かれた結果も含まれている。

上述の両説を踏まえて上図における「動作ノ帰着語ヲ有スルモノ」の項目を見直すと、中では「自動詞」と判断できるのは「進裡頭、回家郷、入學堂、上山、到東京、在這兒」の「進、回、入、上、到、在」のみで、下には「裡頭、家郷、學堂、山、東京、這兒」という動作の目的地を表す処所賓語を伴うのである。「交朋友、做外国、服侍大人、陪他、當武官」は「他動詞+受事賓語」の組み合わせで、「朋友、外国、大人、他」は動詞が表す動作、行為を蒙る人や物である。そのほか、「武官」、「機会」、「自行車」はそれぞれ動作の結果、動作の手段や方式、動作の進行時に頼りとする道具を表す賓語である。石山は「溺愛」を統語構造と間違え、「愛に溺れる」と誤って解釈しているが、実際にこれは動賓関係に基づいて構成された複合動詞で、その上、その意味は構成素の意味の総合から読み取れないのである。即ち、「溺」と「愛」が複合してはじめて「甘やかす」という決まった意味が生じたわけである。

次に、石山（1908）は「他動詞が目的ト帰着語ヲ有スル場合」に挙げられた用例「囑咐他一件事」、「給你這個錢」、「問你那個話」、「告訴他這個話」、「供給你點兒貨」における「他」、「你」のような動作が加えられる対象・相手を「帰着語」と呼び、括弧中の日本語訳では「に」という格助詞で表示され、「目的語」と明記される授与物と性質の異なるものとして見做している。

米田（1922）もこのような、何かを与えたり、又は受けたりする意味、換言すれば授受関係を持つ例文を挙げているが、他動詞の後に連なって現れる物事及びその受け取り手を表す二つの語に対する理解が石山とは些か異なっている。

他教我中国話（彼は私に支那語を教へる）

他們給這个孩子点心（彼等は小兒に菓子に興へる）³⁶⁾

大概の外動詞は皆一つの受事を用ゆるのであるが、往々に二個の受事の働きをする場合がある。その時は一つは物を表示し、一つは人を表示して居る場合があつて、この物を表示するのを直接受事と言ひ、人を表示して居るのを間接受事と言ふのである。直接受事と間接受事の位置は他動詞に密接の関係の有無に依って生ずる区別であつて、用語上に注意されたいのは其の位置である³⁷⁾。

米田は例文の日本語訳では石山と同じく、動作の対象「我」と「孩子」に「に」を、動作を受ける物事「中国語」と「点心」に「を」を用いて表現し、助詞の使用を異にしている。但し、石山の扱い方とは食い違ふところに、米田は「我」と「中国語」、「孩子」と「点心」を同じく「受事」と称し、但し、他動詞との親疎関係により、動詞のすぐ後に置かれるほう、即ち人を表すのを「間接受事」、それに後接

36) 米田祐太郎、『支那語文法研究』、大阪屋号書店、1922、p58

37) 米田祐太郎、『支那語文法研究』、大阪屋号書店、1922、p58

するほう、つまり物を表示するのを「直接受事」と区別をつけているのみである。総じていえば、中国語の文における二重賓語の構造について、石山は日本語文法概念をもって説明を与えたのに対して、米田は中国語自体の性格に基づいてよりの確に把握していると思われる。

おわりに

以上のように、明治・大正期に日本人によって著わされた中国語口語文法著述に見られる動詞の下位分類について検討を加え、この時期の日本における中国語文法研究の一側面を垣間見てきた。結論として取り上げるべき点は大きく二つある。

まず、先述の様々な分類法は如何なる規準によって採られたかという点、主として意味、構造、性質、文法機能の4通りが挙げられる。

「静字」と「動字」はそれぞれ行為か、状態か、そのどちらかを表現することによって決められた術語である故、このような分類法は動詞の語彙的意味に拠るのである。「本来動詞」と「転来動詞」は、言葉の性質を基に行われた分類で、「本来動詞」は元々動詞であるのに対して、「転来動詞」とは、ほかの品詞類より転用されるものである。「単純動詞」と「複合動詞」は動詞の成り立ちより分類されたものである。但し、統語論に基づく視点の欠如のため、二文字以上の多音節語でありながら、実際に方向補語、結果補語、可能補語を伴う統語構造と見るべきものを一律に複合語として取り扱う傾向が顕著である。「貫動詞」と「不貫動詞」、「内動詞」と「外動詞」、「自動詞」と「他動詞」は賓語が採れるか否かによって区別されるゆえ、これらの分類は動詞の文法機能に基づくのである。

次に、日本人の動詞に対する捉え方における他文典との継承関係は主として「内」と「外」の二面から解明できる。

「内」からの影響は動詞に関する論説に見られる大槻文法との密接な関わりによって表出されている。「自動詞」と「他動詞」という術語は日本の国語学者、大槻文彦によって1889年に『言海』の附載文典『語法指南』に於いて初めて取り挙げられたものである。信原、石山、啊麼徒等の日本人研究者は大槻文法における自他動詞の概念を中国語動詞の下位分類に採り入れた。そのみならず、「有対」、「無対」への取扱いからも、『広日本文典』から受け入れた日本語文法の枠組で中国語における動詞の自他の分別に適用しようとした模倣の姿勢が窺い知れる。中国語の文における二重賓語の構造に触れた研究者もいるが、米田だけは中国語自体の性格に基づいてよりの確に把握していると思われる。

「外」から受けた影響という点、「静字」と「動字」、「静動詞」と「活動詞」は中国古典に起源する動静説を基に使われた用語である。元々「静字＝名詞」、「動字＝動詞」という動静説は19世紀に西洋人宣教師に自分の中国語研究に導入された後、変容を遂げた。米国人宣教師 Tarlton Perry Crawford が『文学書官話』で「静字」と「動字」を動詞の下位カテゴリーの名称に用い、前者が情勢を、後者が行為をいうものとして捉え始め、その和訳本も原書の記述を踏襲したのである。「内動詞」と「外動詞」は『馬氏文通』における動詞の下位分類の一部に倣い、設けられたものである。

要するに、上記の著作における動詞の下位分類に関する記述には、日本人研究者が独自の理解で中国語の動詞を捉えようとした中、中日両側の文法研究の成果、主として中国語文法学の定礎作『馬氏文通』

と、日本の「折衷文典」の代表作『語法指南』、『広日本文典』に範を求めた姿勢は色濃く反映されている。明治・大正期の日本人による中国語動詞論はこのような「内」からの刺激と「外」からの影響が接触、継承、融合といった流れの中で成立したと考えられる。